

能「三輪 神遊」鑑賞のポイント

作者／世阿弥 季節／秋 所／大和国三輪
前シテ／里女 後シテ／三輪明神
ワキ／玄賓僧都

不思議な能「三輪」

正月には神社に参拝し、仏に日々の罪業の赦しを請う。そこに違和感を感じない日本人の感性は、三輪という能の舞台の上でも繰り広げられています。それどころか三輪明神である大物主命（男神）が伊勢の神である天照大神（女神）の姿で現れたり、睦まじく暮していた夫は実は杉の御神木であったりとか、不思議な世界が縦横無尽に展開していきます。そもそも、最初に登場する僧侶であるワキ（玄賓僧都）に対して、シテ（里女、実は三輪明神）は毎日櫛と鬘の水を届け、自分の罪業を救ってほしいと頼みます。神が仏に救いを求めるところから始まるのです。そして三輪明神は玄賓僧都との出逢いを喜び、三輪の名の元になった神話説話を語り、さらに天の岩戸隠れの物語を語ります。

この複雑かつ大胆に変化する展開は、事前に三輪の詞章を一読されることで、より舞台を楽しむことができるでしょう。

古代神話に見る能の舞の起源

能は舞楽、つまり舞と音楽（囃子）が一体となった芸能です。その起源を「三輪」は伝えています。三輪明神は玄賓僧都に、天照大神が天の岩戸に隠れた時に、八百萬の神達が舞楽をなされたのが神楽の始めだと語ります。この八百萬の神々がアマノウズメやタヂカラオであり、これらの神は能「絵馬」（小書「女体」）に登場します。また、今回の三輪の小書「神遊」の演出では、翁の型と言われるものが度々登場します。つまり「翁」「絵馬」「三輪」には日本の古代から流れる精神文化の根底を通す深い繋がりがあります。

「神遊」で囃子方に求められる高度な技術を伴った奏法は、特に神楽の場面で顕著です。笛のユリと呼ばれる奏法が多用され、巫女をトランス状態に誘うとされます。そこに私たちは古代につながる音を聞くことができるかも知れません。

「神遊」という小書

小書とは常とは違う特殊演出で行う舞台です。「三輪」では流儀によって違う名前がつけられています。観世流は「誓納」、片山家の「白式神神楽」、金剛流では「神道」などです。なぜ喜多流では「神遊」と名付けられたのか、実は定かではありません。しかし、その舞を見れば「遊び」という意味の深さが伝わってくるでしょう。神々しいまでの舞は、まさに神の世界で遊ぶかのようなようです。観ノ座ではこの小書について紐解きます。

「三輪 神遊」詞章 (喜多流)

ワキ これは和州三輪の山陰に住まひする
玄賓僧都にて候 ここにいづくとも
知らぬ女性 毎日櫛闕伽の水を持ち
て来り候 今日も来りて候はば 栖
を尋ねばやと思ひ候

シテ 三輪の山本道も無し 三輪の山本道
も無し 檜原の奥を尋ねん げにや
老少不定とて 世の中々に身は残り
幾春秋をか送りけんあさましや
為す事無くて徒らに 憂き年月を三
輪の里に 住まひする女にてさむら
ふ また此の山陰に玄賓僧都とて
貴き人の御入り候ほどに いつも櫛
闕伽の水を持ちて参り候 今日も又
参らばやと思ひ候 いか此の内へ
案内申し候

ワキ 山頭には夜孤輪の月を戴き 洞口に
は朝一片の雲を吐く 山田守る僧都
の身こそ悲しけれ 秋果てぬれば
訪ふ人も無し

シテ 此の内へ案内申し候
ワキ 案内申さんとは又いつも櫛闕伽の水
持ちて来る人か

シテ 山影門に入って推せども出でず
ワキ 月光地に鋪いて掃へども還生ず
シテ／ワキ 鳥聲とこしなへにして老生と
閑なる山居

地謡 柴の編戸を推し開き かくしも尋ね
切櫛罪を助けてたび給へ 秋寒き窗
の内 秋寒き窗の内 軒の松風打時
雨れ木の葉搔き敷く庭の面門は葎や
閉ぢつらん 下樋の水音も苔に聞え
て静なる此の山住ぞ寂しき

ワキ 私は大和国三輪の麓に住む玄賓僧
都です。この頃どこからともなく
女が櫛を摘み闕伽の水を汲んで持
つてくるのです。今日も来たら名
を尋ねようと思います。

シテ 三輪の麓には道も無いので、檜原
の奥へ向かおう。人の命は定め
無いもので老人が先に死に、若い
者が後に残るとも限らない。幾度
も季節を送り生きながらえている
のは誠にあさましい。私はただ年
月を過ぎし三輪の里に住む女で
す。玄賓僧都に、いつも櫛を摘み
闕伽の水を汲んで差し上げていま
す。今日も伺いましょう。

ワキ この庵室の方にお頼み申します。
しい月が照り、朝は岩穴からちぎ
れた雲が出ていく」所で、誰も訪
れない山田の番をする案山子のよ
うな我が身はあわれなものだ。

シテ この庵室の方にお頼み申します。
ワキ 案内を頼む人はいつも来る人か。
シテ 山の影は門に入って推しても出よ
うともしません。

ワキ 月光は地面に照り映り、掃いても
またすぐ月影ができています。

シテ／ワキ 鳥の聲が絶えず聞こえ、静
かに住むに相応しい山家住まい。
地謡 柴の編戸を開け、櫛を持って来る
私の罪をお救いください。寒い草
庵の軒の松に吹き渡る風音は時雨
のよう、庭には木葉が散り、門は
雑草に閉じ込められ、苔の下から

シテ いか僧都へ申すべき事の候
ワキ 何事にて候ぞ

シテ 妾に御衣を一衣賜はり候へ

ワキ 易き間の事此の衣を参らせ候

シテ あら有難や候 さらば御暇申し候

ワキ 暫く候 此程櫛闕伽の水を持ちて来

り給ふ志 返す返す有難う候 さて

さていづくに住み給ふ人ぞ栖を御明

し候へ

シテ 妾が栖は三輪の里 山本近き處なり

而も我が庵は 三輪の山本戀しくは

とは詠みたれども 何しに我をば訪

ね給ふべきさりながら 猶も不審に

思し召さば 訪ひ来ませ

地謡 杉立てる門をしるべにて 尋ね給へ

と云ひ捨てて かき消す如くに失せ

にけり

下桶の水音が聞こえる有様です。

シテ 僧都にお願いがあります。

ワキ 何でしょう。

シテ 御衣を一枚頂戴したいのです。

ワキ 易き事、この衣をあげましょう。

シテ 有難うございます。それではこれ

でお暇いたします。

ワキ お待ちなさい。櫛闕伽の水をいつ

も有難う。あなたはいったいどこ

に住んでいるのですか。

シテ 私の住み家は三輪の里、山の麓

です。歌にも「わが庵は三輪の山

もと戀しくは、とぶらい来ませ杉

立てる門」とあるような所です。

不審に思われるのでしたらお訪ね

ください。

地謡 杉の立っている門を目印にお尋ね

くださいと言って、消えるように

いなくなってしまった。

(中人)

ワキ 此の草庵を立出でて 此の草庵を立

出でて 行けば程無く三輪の里近き

あたりか山陰の 松はしるしも無か

りけり 杉叢ばかり立つなる 神垣

はいづくなるらん 神垣はいづくな

るらん

不思議やこれなる杉の下枝を見れば

ありつる女人に與へつる衣の掛りた

るぞや 寄りて見れば衣の褻に金色

の文字据れり 讀みて見れば歌なり

三つの輪は清く淨きぞ唐衣 くる

と思ふな 取ると思はじ

シテ ちはやふる 神も願の有る故に 人

の値遇に 遇ふぞ嬉しき

(中人)

ワキ 草庵を出て行くと、間もなく三輪

の里に来たが、三輪明神はこの近

くなのだろうか。辺りに目印の松

は無く、杉林があるばかり。お社

はどのあたりなのだろうか。

おお、不思議なことにこの杉の枝

を見ると、先ほど女に与えた衣が

掛かっている。寄つて見ると金色

の文字が書いてある。読んでみる

と歌ではないか。「三つの輪は清

く淨きぞ唐衣、くると思ふな取

と思わじ」

シテ 神にも救われたいという願があり

人に逢うのは嬉しいことです。

ワキ これなる杉の二本より 妙なる御聲
聞えさせ給ふぞや 同じくは末世の
衆生の迷いを照らし 御姿を拝まれ
おはしませと 念願深き感涙に 墨
の衣を濡すぞや

シテ 恥づかしながら我が姿 上人にまみ
え申すべし罪を助けてたび給へ

ワキ いや罪科は人間にあり これは妙な
る神道の

シテ 衆生濟度の方便なるを
暫し迷いの

ワキ 人心や

地謡 女姿と三輪の神 女姿と三輪の神
禪掛帯引替へて 唯祝子が著すなる
烏帽子狩衣 裳裾の上に掛け 御影
あらたに見え給ふ忝の御事や

シテ それ神代の昔物語は末代の衆生の為
濟度方便の事業 品々以て世の為な

シテ 中にも此の敷島は 人敬つて神力増
す

地謡 五濁の塵に交はり 暫し心は足曳き
の大和の國に年久しき夫婦の者あり
八千代を籠めし玉椿 變らぬ色を頼
みけるに されども此の人 夜は来
れども晝見えぬ 或夜の睦言に御身
如何なる故に因り かく年月を送る
身の 晝をば何と烏羽玉の夜ならで
通ひ給はぬはいと不審多き事なり
唯同じくは長へに 契を籠むべしと
ありしかば 彼の人答へ云ふやう
げにも姿は羽束師の洩りてよそにや
知られなん 今より後は通ふまじ
契も今宵ばかりなりと 懇に語れば
さすが別れの悲しさに 歸る處を知
らんとて 苧環に針を付け 裳裾に

ワキ 不思議だ、二本の杉から靈妙な神
の御聲が聞こえる。神様、末世の
衆生の願いを聞き入れ、お姿を拝
ませてください、と願うと感激の
涙がこの僧衣を濡らします。

シテ 恥づかしながら上人に私の姿をお
見せしましょう。私の罪をお救い
ください。

ワキ いえ、罪は人間にあるもので、あ
なたは靈妙なる神様ですから。

シテ いや衆生を救う方便のためには
暫く迷いの深い

シテ 人間の心。

地謡 おお、三輪の神が女姿で現れにな
った。禪も掛帯もお召しにならず
巫女が着るように裳の上に狩衣を
着て烏帽子を被った姿をお示しに
なるのはありがたいことです。

シテ 神代の昔物語は末世の衆生の為
苦悩を救つて極楽へ渡す方便
シテ 中でも和歌は尊いもので、人が敬
えば神の威光が増すのです。

地謡 神はこの濁った人間界に降りて一
時は神の心も人間のようになる。
その一例に大和の國に夫婦があり
互いに心は変わらないと契つてい
たが、夫が夜は来るが昼は来ない
ので「あなたはなぜ夜しか来ない
のか。夜も昼もここにいてくださ
い」と問うと、夫は「この姿が恥
づかしく、昼来たならば外の人に
も知られよう。今日よりは夜も通
うことは無い。あなたとの縁も今
夜限りだ」と。女は別れを悲しみ
夫の帰る場所を知ろうと、苧環の
糸に針をつけ、裳裾にとじつけて

これを綴ぢ付けて後を控へて慕ひ行く

シテ まだ青柳の絲長く

地謡 結ぶや速玉の己が力にささがにの

絲繰り返し行く程に 此の日本の神垣や杉の下枝に止まりたり こはそもあさましや契りし人の姿か 其の絲の三縮残りしより 三輪のしるしの過ぎし世を語るにつけて恥づかしや げに有難き物語 聞くにつけても法の道尚しも頼む心かな

シテ さらに神代の物語 委しくいざや現

し彼の上人を慰めん

地謡 まづは警戸の其の始 隠れし神を出

さんとして 八百萬づの神遊 これぞ

神楽の始なる

シテ ちはやぶる

(神楽)

天の警戸を引き立てて

地謡 神は跡無く入り給へば 常闇の世と

はやなりぬ

シテ 八百萬づの神達 警戸の前にてこれ

を嘆き 神楽を奏して舞ひ給へば

地謡 天照大神其時に警戸を少し開き給へ

ば 又常闇の雲晴れて 日月光り耀けば

人の面白々と見ゆる

シテ 面白やと神の御聲の

地謡 妙なる始の 物語

シテ 思へば伊勢と三輪の神

地謡 思へば伊勢と三輪の神 一體分身の

御事 今更何と磐座や 其の關の戸

の夜も明け かく有難き夢の誥 覺

むるや名残なるらん覺むるや名残な

るらん

跡を慕って行ったのです。

シテ 初め糸は長かったのですが

地謡 次第にたぐって行くと、糸が山

の麓の神杉の下枝で止まったのです。何と自分が契りを結んだ人はこれであったのか。その時芋環の糸が「三わけ」残っていたので、三輪といい、印の杉としようになったのです。こんな昔話をするのも恥づかしい。こうした有難い物語を聞くと神仏を信仰する心になります。

シテ それでは神代の物語を示して上

人をお慰めしましょう。

地謡 天照大神が天の岩戸にお隠れに

なつた時、大神を岩屋から出そ

うと多くの神達が舞楽をなされ

た、これが神楽の起源です。

シテ ちはやぶる

(神楽)

天照大神が天の岩戸を閉めて

地謡 中へお入りになって、この世は

常闇の世界となつてしまった。

シテ 多くの神達がこれを嘆き、岩戸

の前で神楽を奏すると

地謡 天照大神は岩戸を少し開けてご

覧になり、常闇の雲が晴れ、月

日が輝いて人々の顔が白々と見

えたのです。

シテ 神々は喜び「おも白」と仰った。

地謡 妙なる始めの物語。

シテ 思えば伊勢と三輪の神は

地謡 一体がお分かれになったもので、

いまさら言うまでもないこと。

おお、夜が明けありがたい夢も

覚め名残り惜しいことです。